京城日報
朝刊
京城府太平通一丁目三十一番地　發行所　合資會社　京城日報社
編輯兼印刷發行人　高宮太平

元旦早々、敵基地に巨彈

陸鷲贛州・永安を急襲

軍事施設 軍需倉庫 飛行場等を爆碎

【南京二日同盟】支那派遣軍報道部發表（一月二日午後二時二十五分）輝かしき昭和十八年の元旦早々わが陸鷲部隊は戰爆連合の大編隊をもつて贛州（江西省南部）を急襲し同敵飛行場ならびに軍事施設、贛州對岸の軍需品倉庫を爆撃多大の損害を與へ全機無事歸還せり

【南京三日同盟】支那派遣軍報道部發表（一月三日午前十一時十分）一月二日わが陸鷲の戰爆連合大編隊は堂々鵬翼を連らねて永安（福州西方二百キロ）の上空を壓し、永安市内の敵燃料廠および彈藥倉庫ならびに軍需工場群を求めて攻撃、これを爆碎しあるひは炎上せしめて全機無事歸還せり

重光駐華大使　汪主席と懇談

【南京二日同盟】中央との要務打合せを終へ一日歸任した重光駐華大使は、二日午前十一時公館に汪主席を訪問、新年の挨拶をなしたのち約一時間に亙つて懇談した

栗山事務總長　サイゴンへ

【ハノイ二日同盟】佛印大使府栗山事務總長は目下サイゴンにあるドクー總督と懸案交渉懇談のため二日夕ハノイ發サイゴンに向つた一月末まで同地に滯在の筈

生産戰でも敵を壓服せん

今や前線と銃後の別なし

【東京電話】東條首相は元旦新春の辭の放送を行ひ『今や帝國は戰爭第一年において大東亞の廣大な地域において直ちに戰力化することの出來る巨大な重要資源を確保した』ことを強調した、絶對不敗の戰略態勢確立と相俟つてわれわれは今や過去の消耗經濟を脱して建設經濟の優位を確保した、しかし直ちに戰力化し得る重要資源といつてもそれは飽までも資源に過ぎず戰力ではない、重大戰局の段階に入つた、大東亞戰下二度目の新春を迎へてこれら重要資源の戰力化が喫緊の要務としてこれに應ずる政府、一億國民の重大決意が要請されてゐる、すなはち

大東亞戰爭　は本格的長期戰に入つたが、今日の長期戰は過去における三十年戰爭、百年戰爭の如き『緩慢なる戰爭』の繼續ではなく『激烈なる決戰』の連續する長期戰であり、しかも一度決戰に敗れんか銃後の戰鬪力の増強も戰略態勢の優位も挽回は不可能に近い、嘗つて東條首相のいつた如く今日の決戰にも明日の決戰にも敵を擊滅し去らねばならないのが大東亞戰の現段階である、しかしてかゝる連續的決戰に常に勝利を得る方途は一に陸海空軍の戰鬪力如何にある、皇軍將兵の忠勇武に加へ旺盛なる士氣と鍛へに鍛へた訓練は斷じて敵の追隨を許すものではない、しかし一面近代戰鬪力は軍隊の質のみが凡てではなくこれと並んで優秀なる武器を多量に必要とする、肉彈となつて敵陣に突入するわが陸海軍の勇士に肉彈に劣らぬ戰車を、一機でも一台でも多く送ることこそ比類なき皇軍將兵の優秀性を剩すところなく裏附けるものであつて、かくてはじめて完璧の戰鬪力は形造られて敵をして反擊の一指をもそめ得ざらしめる態勢が出來上る

敵アメリカ　は緒戰の敗戰から漸く立ち直り尨大なその物と生産力に物をいはせて必死の反擊に出でつゝある、アメリカの生……

開戰以來の　相つぐ敗戰をひた隱しにし、損害を小出しに發表するとともに新戰船の竣工を矢繼早に發表して來るべき一大攻勢を唱へ民衆の目を胡魔化して來たアメリカはソロモン海戰以來指導方針に一歩を進めて自らも損害を強調……

われ〳〵の　……

天皇陛下御親祭

宮中元始祭の御儀

【東京電話】天皇陛下には年頭の元始祭に際し萬機の政を聞召される神殿にも御同様御親祭あらせられ、四日午前十時賢所、皇靈殿、神殿において執り行はれた、小磯朝鮮總督、板垣朝鮮軍司令官以下文武官來賓約二百名參列、開扉の儀についで國幣宮司の祝詞奏上あり、長くも天皇陛下宮中賢所、皇靈殿において御親祭を執り行はせられると洩れ承る御儀を遙かに偲び奉りつゝ畏くも天皇陛下には年頭に…… 東條首相以下文武顯官ら參列し……

朝鮮神宮の元始祭

けふ政始の御儀

……三日午前十時より朝鮮神宮大前……院顧問村忠重陽、朝鮮人相鄭両氏、李王職長官李恒九男、波田朝鮮總督府總務局長、武官總代長屋少將、道民總代高京畿道知事、府民代表古市京城府尹らの順位で玉串奉奠、頌辭たちこめる神域に必勝祈念の誠心を併せて捧げつゝ同十一時めでたく閉扉終了した

米、木造機生産へ

【ブエノスアイレス一日同盟】ワシントン來電、米戰時生産局はアルミニユーム節約の見地から木造飛行機の製造を研究中であつたが、英國空軍が全木造の小型爆撃機を製造して成功を收めたのに鑑み大規模な木造飛行機の製造に乘り出すこととなる模様で、今後は陸海軍の木造戰鬪用機の製造に眞劍な考慮を拂ふに至るだらうと見られてゐる、最近ルイジアナの造船業者アンドリュー・ヒギンズが陸軍との契約により製作することになつた一千二百台の輸送用飛行機は全部木造機となる模様である

米戰時生産狀況を發表

【ブエノスアイレス一日同盟】ワシントン來電、米國戰時生産局長官ドナルド・ネルソンは十二月廿七日十一月中の米國軍需生産狀況に關する報告を發表したがその要旨左の通り
一、十一月中に操業を開始した軍需工場の生産によつて軍需生産額は十月に比し十二パーセントを增加これを開戰前の生産期に比較すれば四倍の增加である
一、十月中生産額に比し十一月の各種軍需生産の增加比率左の通り
飛行機十八パーセント、戰車砲彈約十四パーセント、海軍關係九パーセント、商船二十六パーセント
一、被軍需産業從業者數は一九四一年末の二千九百二十萬から一九四二年末には二千百十萬に減少、これに對し軍需産業は現在一千七百五十萬の從業員を要するが、一九四三年末にはこれを二千萬に增加させなければならぬ

援蒋强化成らず

重慶の遣米使節團　空しく引揚げ

【リスボン一日同盟】ワシントン來電、昨年夏以來米國にあつて對蔣援助獲得に奔走してゐた重慶政府の遣米軍事使節團は七ケ月間にわたる奔走を空しく何ら成果をあげ得ぬので遂に歸國するに決し、使節團長は三十一日ホワイトハウスを訪問してその旨通告した

艦船五を擊沈

獨海軍、北氷洋の戰果

【ベルリン二日同盟】獨軍筋の情報によれば、獨海軍部隊は北氷洋水域で敵護送船團を襲撃し護衛の敵艦隊と交戰、敵巡洋艦數隻に損傷を與へ驅逐艦一隻を擊沈したほか輸送船四隻を無電攻擊によつて葬り去つたと傳へられる

獨ソ兩軍激戰中

ドン左岸地區

【リスボン二日同盟】前線情報によればロストフ東南百八十キロドン河左岸の要衝ツイムリヤンスカヤ周邊地區で二日早朝來獨ソ兩軍間に激戰展開中といはれる、他方コーカサス戰のナリチツク南方地區でも大規模な遭遇戰が行はれ戰鬪はチコラより漸次テリヨク東岸地區に移動してゐる

赤軍戰車一千九百擊破

東部戰線

【ベルリン二日同盟】獨軍司令部は二日次の戰況公報を發表した　ルジョフ地區においては十一月二十五日以來十二月三十一日までに獨軍は赤軍戰車一千九百十台を擊破、鹵獲乃至擱坐せしめ……

北氷洋戰線

チ元帥更迭　後任にジューコフ大將

【リスボン二日同盟】モスコー來電によれば、赤軍南西方面軍司令官チモシエンコ元帥は今回更迭され後任に……ジューコフ大將が任命された

駐日獨大使更迭

後任はスターマー駐支大使

【ベルリン二日同盟】ドイツ外務省一日發表＝駐日ドイツ大使オイゲン・オツトー少將は今回更迭し後任には中華民國駐在ドイツ大使ハインリツヒ・スターマーが任命された

獨外務省發表

【ベルリン二日同盟】獨政府は新春を期し、駐日大使をはじめ在外外交陣營の刷新をはかることとなり二日外務省は次の通り發表した
一、左の三大使は外務本省の某要職に轉任、駐日大使オイゲン・オツトー、駐スペイン大使フオン・シユトーラー、駐スエーデン大使プリンツ・ツー・ビート
一、駐日大使オイゲン・オツトー少將の後任は南京駐劄大使スターマーを任命、中華民國駐在大使の後任が正式決定をみるまで東京駐劄大使館公使エリツク・コルトが代理大使として南京に赴任する
一、スペイン大使の後任には外務本省よりフオン・モルトケを任命
一、スエーデン大使の後任には元ワシントン駐劄代理大使トムセンを任命

伊軍戰況發表

【ローマ一日同盟】伊國大本營發表
地中海戰線

英海軍主力　地中海へ出動か

英驅艦ブ號喪失を發表

獨、トルコ間にクレヂツト設定

決戰時局を打診する ③

新春對談　語る人 尾崎士郎氏

來間　尾崎さん御苦勞でしたな、半年以上でしたかね

尾崎　倫度丸一年でしたよ

來間　あなたは支那事變にも北支や中支や何回か從軍されたが此度のフイリツピン從軍では更に新しい體驗と感想を持たれたでせうね

強い〝米比軍〟

眞夏の歳末

新戰爭文學

必滅の氣魄

郷愁起らず

尾崎士郎氏　明治三十一年愛知縣に生る、中學を經て早稻田大學に學ぶ、昭和十一年『人生劇場』を發表して一躍文壇の流行作家となる、支那事變には逸早く現地に赴き『悲風千里』等を著す、大東亞戰爭勃發するや、陸軍報道班員としてフイリツピンに活躍最近歸還（朝中央協力會顧問）

逞しき戰爭文學へ

現地に體驗する意欲

高らか南方建設譜
昭南に挺身 大臣級四人男

【昭南二日同盟】南方建設の一驍、こゝ昭南は皇軍占領後の第一春を常夏の世界に迎へた、その『常夏の新春』を迎へた人々のうち軍政顧問の永田秀次郎、砂田重政、徳川義親侯や昭南市長大達茂雄の諸氏ら大臣級の人物が、それぞれの職場で大いにハリキつてゐる

◇

永田さんは官邸にをさまつて専ら軍政の方針を練つてゐる、老いてますます壮健、南方を論じはじめると例の飄逸な口調のなかにも次第に熱をおび、氏一流の識見の冴えを見せるのにはいよいよ敬服させられる、『この南方には争がないのでネ』といつて南進以来俳句から絶縁を宣明した俳壇宗匠も最近の雨期の涼しさにあつてその句論を改める必要を感じてゐるかも知れない

◇

砂田さんは政界の利け者だつただけに訪れる人は跡をたたない、ちやうど永田さんが俳句と絶縁したやうにこの人は政治から絶縁したといつてゐるが矢張りもとの畑は争へないもので、マライ、スマトラを内地へ結びつける太い綱のやうな役割をいまの砂田さんは果してゐる

砂田邸ではケダ州から送つてくる糯米でよく美味いオハギをつくる、訪客は大ていこのオハギを御馳走になりながら現地の食糧増産運動に関する講釈を一席きかされる、だから砂田邸のオハギもいまでは昭南名物の一つになつてゐる

◇

大達さんの住む市長官舎は粗末な住宅である、麻雀の好きな大達さんは時として市の職員たちと一戦戦はせてゐることがある、この市長さんの飾らない素直な姿は現地人たちに限りない尊敬と親愛との念をうゑつけてゐる、大達市長の人気は在留邦人ばかりでなく八十萬全市民の間でも圧倒的である、それかといつて大達さんは決してやさしいばかりの市長ではない、たまたま在留邦人の行動に不正や間違ひがあると市長さんは持前の実行力を発揮して断乎たる措置をとる

◇

着任以来九ケ月、大達さんは戦争におびえた現地民に対しては慈母であり、戦勝におごらうとする在留邦人に対しては厳父である、また昭南の正義を守る人として南方建設の支柱として専ら闘をつゞけてきた

◇

徳川侯は着任以来好きな虎狩りに出かける暇もなく仕事に忙しい、先般昭南市の要請をうけて昭南博物館長兼昭南植物園長に就任したマライやスマトラのサルタンたちも流石に『マーキス・トクガワ』には絶対心服して、この南方の理解者には深い尊敬を捧げてゐる

徳川侯は平素粗末な軍服に革ゲートルの姿であるが、腰間の軍刀の目釘には金色の三葉葵がピカリと輝くのが見える

このほかに昭南には、貴族院議員大塚惟精氏と元大蔵次官廣瀬豊作氏とが同じく軍政顧問として活躍してゐる、大塚さんは例の古武士のやうな風格で終始恭然として軍政指導の任に当つてゐる、『軍政指導の要諦も謂するところ剣の道と一如だ』と鉄道戦士である大塚さんはいつてゐる

昭南博物館にある刀剣類の鑑定は大塚さんが餘暇をさいて行つたものだ、廣瀬さんは几帳面に役所の机に向つて難しい南方の経済財政をみてゐる、日曜日には官邸の傍の空地に出て書生を相手にポカリポカリとゴルフの球をぶつ叩くのが日課だ

◇

このほかに外交畑出身の寺島廣文氏、代議士の増永元也氏が同様軍政顧問として昭南に活躍してゐる、また井伏鱒二氏が屋台風に造られた寿司屋の腰掛けに落着いてスシをつまんでゐるのがよく見かけられ里村欣三氏や小栗虫太郎氏らもハリキつてゐる、… 昭南はスシも食へる—味噌汁も汲へる、だいぶん以前から蛇皮でつくつた日本風の女の草履が売出された、しかし、日本の風習の中で明かに南進に適しないものが二つある 第一は女性の日本服で、あの大きな帯で胸をしめ上げてゐるのは衛生的にも外観的にも最善しくてとうにもならない、第二は日本の男子がところかまはずにやる立小便だ、之は現地民に対する影響も悪いので厳重に取締れといふ鉄道の投書が警察へしばしば舞込む始末である

写真＝右上より徳川義親侯、永田秀次郎氏、砂田重政氏 左上より大達茂雄氏、大塚惟精氏、廣瀬豊作氏

マニラ陥落を語る
本間雅晴中將の回想

【東京電話】決戦にあけた新春の御年玉として一億国民を歓喜させた『比島の首都マニラ陥落』の一周年記念日がめぐつて来た、当時比島方面陸軍最高指揮官として寡兵よく敵を撃砕、昨年八月晴れの帰還をなし小石川区林町の自邸に悠々自適の生活を送つてゐる本間雅晴中将に感慨深いあの日の回想談をきいた

マニラ 攻略作戦で最も苦心したのはリンガエン湾の敵前上陸であつた、十二月の廿二日夜、われわれの船団はリンガエン湾に敵前上陸の機をねらつた、静かであるはずのリンガエン湾は四、五日前南支那海に起きた低気圧のため二米半をこえる物凄い巻波に荒れ狂つてゐる、敵はわれわれの上陸に備へ、三個師団に上る大部隊で守備をかため、海岸は無数のトーチカ、鉄條網、機雷と十重二十重、蟻も入れぬ防備ぶりである、だが、われわれは突入した、第一陣が死の敵前上陸を敢行した、物凄い巻波のため船は横倒しになり砂に埋まつて帰つて来ない、それを敵前で苦労して掘り起し、第二陣、第三陣の上陸部隊を送つたのだ

上陸に 成功した後もマニラに突入するまでは苦闘の連続であつた、ルソン平野は川が多く敵は想像にも及ばない莫大な量のダイナマイトで橋梁を爆破してゐる、敵の破壊ぶりはわれわれの前進を阻止するといふだけでなく全く橋の影も形も残さないまでに徹底したものであつた、したがつてカルメン河、カルンピット河の渡過などには兵は敵前上陸にもまさる労苦を重ねた、われわれの進撃をささへられなくなつた敵はマニラの無防備都市を宣言したが、その裏で逆に彼らは恐るべき焦土戦術の挙に出たのだ、無防備都市の宣言についてはあとで解つたのだが、マッカーサーがマニラ全市民の退却を命じたのに対し、フィリッピン独立の志士アギナルド将軍は『市民をそのまゝにして、軍隊こそ退却すべきだ、それでなければ無防備都市ではない』と反対、言ひ争つたが遂にアギナルドの主張がいれられなかつたのである、無防備都市 どころかマニラには軍事施設がいたるところにあり、寧ろわが軍は彼らの焦土戦術からマニラを守るため、兵隊を入れたのである、そして被害を最小限度にとゞめることが出来たのである、いま比島はどこに戦争があつたのか解らぬといはれるまでに見事な復興を見せてゐる、浅薄なアメリカの文化に毒され日本の眞の姿を理解出来ないやうに教育された比島人が、東亜の自覚に立返り、日本に出来る限り協力しようと政治、経済、文化あらゆる面に懸命の努力を払つてゐる、それを思ふにつけても、マニラ陥落一周年記念日を迎へ、比島戦線に尊い護国の華と散つた英霊に対し私は衷心から感謝の誠心を捧げたい【写真＝本間将軍】

ヨイコの初便り
東條、山本両大將へ 比島

【マニラ一日同盟】赫々たる戦果に建設の足どりも快調に比島初の新春を迎へた、陸海前線将兵はもとより在留邦人一同敵米英撃滅の決意を一段と固めてゐるが、この輝く新春を迎へ比島の親日少年から山本聯合艦隊司令長官と東條首相にあてた年賀状を同盟通信マニラ支局に送つてきた、この親日少年はマニラ日本人小学校の五年生トウゴウ・デユラン君(二)および同校附属幼稚園に通ふノギ・デユラン君(八)の兄弟である

この両少年の父ビオ・デユラン氏は昔から大の親日家として知られ自分の住宅も和風を取り入れた日本間や日本式の庭園を造つてゐるほどで戦争直前一九四一年の選挙には、反日空気が横溢してゐる中で親日を標榜して立候補し落選はしたけれども、戦後彼の希望はやうやく実を結び過般新生比島の建設を双肩に担つてカリバピ(新比島奉仕団)が誕生するや、その本部総務部長に就任した

愛児の名前に『トウゴウ』『ノギ』などの日本名を冠したのも彼が敬慕措かざる日露戦役の両将東郷元帥、乃木大将の両将軍の名に因んでつけたものである、この兄弟は戦前から日本人小学校に通学し、生徒間でもデユランとはいはずトウゴウ君、ノギ君と呼ばれて親しまれてきた、兄の『トウゴウ君』は日本語の会話はもちろん読み書きも立派にでき、日本の少年と全く変らない、弟の『ノギ君』は会話は出来るが、まだやつと片仮名を覚えただけで、今年一年生にあがることになつてゐる

トウゴウ君から 山本司令長官宛

新年おめでたうございます、ことしマニラ日本人小学校の五学年になります、僕の名まへは日露戦争のときロシヤ海軍を日本海の海戦でうちやぶつた東郷げんすいの名まへをもらつてつけたのです、だから僕は日本の海軍がいちばん好きです、こんどの戦争が始まつてから僕は日本の海軍が勝つやうにといのつてゐましたが、日本の海軍がほんたうに強いのでびつくりしました、十二月八日に日本海軍はハワイのアメリカ海軍をぜんぶ沈めました、シンガポールのイギリスの海軍も沈められたりにげたりしました、まだ戦争が始まつて一年しかならないのに日本の海軍はアリユーシャンからソロモンぐん島まで行つてアメリカやイギリスの海軍をたくさん沈めました、太平洋もインド洋も日本の海軍のものです、日本のせん水かんの活躍には涙がこぼれた

ノギ君から 東條首相宛

ボクハニツポンノエウチエンデス、コンドイチネンセイニナリマス、『ニガツカラ一ネンセイ』ボクハトウゼウサンノシヤシンヲトモダチガクレマシタ、シンブンニモヨクオナジシヤシンガアリマス、ソレモミナアリマス、モウダイブタマリマシタ、ニツポンノ『ニユースエイガ』デモミマシタ、ボクハニツポンノヘイタイサンノキルヤウナフクヲモツテヰマス、オオキクナツタラ…

大いなる祭【26】
中野實(作) 三芳悌吉(繪)

キスキーグラスをなめながら笑ひかけてゐる。

『まあ、お珍らしい。』

と、次の瞬間、美々もこぼれるやうな媚態をたゝへて、大脇に椅に近づいた。

『随分暫くだつたぢやありませんか、林さん』

と、彼女は椰の贋名の林にわざと力を入れて云つた。

『あゝ。忙しかつたんだ』

『今まではちよつと差支へがあつたんだ』

『なんだか怪しいわねえ』

椰は、もう相当に酔つてゐるらしく御話でこたへた。

『何がそんなに忙しいのよ』

『だつて、ひつきりなしにお客さまなんだよ』

『綺麗なお客さまなんでせう』

『はゝゝゝゝ。だた、うれしいがね。生憎、西施のやうな美人は一人も来ないんだ。みんな廣東のお客さまなんだよ』

『廣東……』

と、美々は聞き咎めたが、さあらぬ態で、

『どういふお客さまよ』

『どういふお客だつていゝぢやあないか』

『でも、気になるもの』

『はゝ、いやに、気を持たせるね』

『どつちが……』

と、美々はわざと拗ねたやうに睨み、

『ほんとに気になるから聞いてゐるんぢやあありませんか』

『嬉しがらせをいふね。しかし、そんなに気になるなら、見せてやつてもいゝよ』

『どうして』

『だつて、あんたの話を聞いてゐると、今度の日本の戦争と関係があるやうぢやあないの』

『あるかも知れんね』

『まあ、怖いわ』

『ぢやあ、来なくてもいゝよ』

『いや、行く、行く。連れて行つて頂戴』

『連れて行つてもいゝが……。おい、美々。今晩、僕は、君を返しやあしないよ。それでもいゝかい』

『それでいゝだらう。ね、美々』

椰は彼女の手を強く握りしめて、眞珠の耳環に熱い息をふきかけた。

『いゝわ。あたし、帰らないわ』

『きつとだね』

『ええ。今から店を抜け出すからあんた階下に待つてゐて頂戴』

▲新刊紹介 ▲石炭を生む山(大宮昇著) 画家が炭鉱の取材を求めんとして炭鉱を実地踏査し、その記録を坑内にある少年にスケッチ入りの手紙で傳へようとした『炭礦通信』である、文部省及日本出版文化協会より推薦を受けてゐる(六十五銭 東京神田神保町一丁目一學習社)